

すべての子どもに「人間として生きる」ことの味を！

斉藤 浩志

「新潟の教育情報」の発刊おめでとうございます。そして、「にいがた県民教育研究所」設立へむけての壮挙に、心からはげましの拍手を送ります。

私は新潟県を出てもう三五年、人生の半分以上を県外で暮し、とくに神戸大学では二五年になります。それでも故郷というものは不思議なもので、自己紹介では「新潟の出身で……」とためらいなくでてきますし、父と弟夫婦の家を訪ねれば自然に「中条井」で会話にもとけ込みます。やっぱり「新潟県人だな」と思います。とりわけ、昨年暮の母の死去で何度か帰郷する機会があり、自分の生育の歩みを改めてふりかえったり懐しい先輩友人たちと出会うこともあったりして、急速にまた新しく故郷を肌で感じるようになりました。そういうなかで今回の研究所設立準備の報に接し嬉しさもひとしおです。

私は今日の教育研究と実践の中心的な課題は「すべての子どもに人間として生きることの味をつかませること」ではないかと考えています。授業もその他の学校や家庭でのとりくみも、結局ここに実を結んだ時に、はじめて「教育」の名に値するものになるのだと思います。たとえ教科の勉強の成績が悪くとも、頭の回り方が鈍くとも、身体の障害があったり家庭環境に恵まれなくとも、すべての子どもがそれぞれに「人間の生命を大事にして生きる」ことをつかむことは、その子にとって「生きること」の意味でもあります。教育とはそれを子どもにつかませるためなのでしょう。

「人間として生きる」ことの味をしめたものが荒れたりするわけがない。非行激増という前に、非人間的な社会をつくったといいかえるべ

きだ」(ハツ塚実「バクおじさんのくる教室」筑摩書房)という指摘こそ、暴力・非行問題をはじめとする今日の教育問題の核心についています。ひとりひとりの子どももなかに「人間として生きる」ことの味をどう発見させるか。そのためには、まず、子どもをひとりの人格(人間)として「まるごととらえる」(クルブスカヤ)ということ、つまり「子どももなかに人間をとらえる」ことが必要でしょう。「まるごと人間」の姿はけっして良否・善悪のレッテルで単純にとらえられるのではなく、「つまづき、立往生し、おののきながら自立することをねがって生きている」姿だと思えます。その「魂のふるえ」に「寄り添って」子どもをとらえるということでしょう。私は、それは単に「温情」という問題ではなく、「民主主義と人権の思想による子ども観(人間観)」の問題だと考えています。子どもの人権を大切にすると、それはそういうことでしょう。「教育の荒廃」といわれるものがあるとするならば、それは何よりも「子ども観(人間観)の荒廃」なのだと思えます。

私には、今日、教育についてのこのような視点からの「とらえ直し」が求められているような気がします。それは、単に子どもに対してのとりくみとしてだけでなく、教師・親自身が、自分の生き方と重ねて子どもたちととりくむべき「教育実践の創造の課題」なのではないでしょうか。私自身今後ともこの道を追いかけていきたいと自分にいきかせているわけです。共に頑張りましょう。